

iv 悩める女教師が「遊び」から学んだ「かわいがりずむ」 ①

[背景]

2007年夏、28才の若き女教師H・Mさんがイタズラ村合宿に参加した。富山県教育委員会が定める「6年次研修」があるが、その一環で夏期休業期間中に「3日間ボランティアをする」研修のひとつが当NPO「子どもイタズラ村親子合宿」であった。

H・Mさんはクラス運営で悩んでいたが、この研修で「子ども力・遊び力」を身につけ、自身が変わりクラス運営もうまくいくようになった。9月になり礼状が届いた。「この合宿を体験し、教育観や人生観が変わった」と書いてあった。その後、1年間、H・Mさんは私達の企画する「遊び師養成講座」に足繁く通った。その後のレポートである。



昨年夏の子どもイタズラ村合宿と遊び師養成特別講座「特別支援教育の現状を『子ども力』の観点から展望する」(08年3月2日)への参加、受講を通し、「自分自身が楽しむこと」、「どの子どもにも”かわいがりずむ”の精神で接すること」の大切さを学ばせて頂きました。

遊酔亭の合宿(2007年8月1泊)では、初め、子ども達をサポートしようと参加したつもりが、自分自身が一番川遊びや料理作り、薪割り、皿回し、コマ回し等、童心に返り、楽しんでいました。教師になってから、大学を卒業したての頃は、よく休み時間ごとに子どもと遊んでいましたが、最近では、色々な事務や雑務に毎日追われ、低学年をよく受け持っている私は、連絡帳等のお返事書き等も多く、子どもに「遊ぼう」と言われても「今日はゴメンね」と断ることの方が多くなっていました。しかし、昨年(合宿後)の二学期からは、自分が楽しむために子供達と遊ぼうと決めました。

二学期になり、皿回しをクラスに3セット持っていき、休み時間、自由に使うことができるようにしました。(もちろん、夏休み中に中級の皿回しができるように猛特訓しました…) らしく皿回しをする姿を披露した私に、子どもたちから「すごい〜!!!」の歓声。ちょっと優越感にひたりながら、私も休み時間、子供達と共に皿回しをして遊ぶようになりました。すると、たくさんの子供が行列を作るようになり、子ども達の間で「1分」で交代するというルールを自分たちで決め、タイマーを使って仲良く交代する姿が自然発生しました。

そして、それまでいつもひとりぼっち気味で人との関わりも苦手だったA君も皿回しに熱中するようになり、皿回しがきっかけで友達との関わりが増え、友達にやり方を教えるまでになりました。A君は自分用の皿回しセットを購入し、家でも練習をしていたのです。一人技ができれば、二人でキャッチ、二人出来たら三人で、というようにA君は自然と息を合わせて友達と活動することが出来るようになっていきました。皿回しが子ども同士の関わり合う場作りになって嬉しく思いました。

皿回しだけでなく、けん玉やディアボロ、ハブのおもちゃを、クラスにもっていき、共に遊び、笑顔がお互い増してきたように思います。

特別支援講座では、早川先生のお話の中で「教師の”愛”(「かわいがりずむ」)が大切。“指導”ではダメ」という言葉が心に残りました。

iv 悩める女教師が「遊び」から学んだ「かわいがりずむ」 ②

教師になってそろそろ10年、毎年いろんな個性を持った子どもたちに出会いました。ADHD、アスペルガー傾向を持つ子どもに出会うたび、どんな指導をすればこの子ども達は過ごしやすいのかと、色んな専門書を読み、こういう個性のあるからこういう支援をしよう、とスキルの動いていた時期もありました。しかし、講座の当日配付資料の中の「特別扱いはいけない」「指導ではダメ！という手書きの言葉に、最近自分もつくづくそうだなあ、と思うようになりました。今まで「この子はADHD傾向だから」と自分の中で勝手に診断名をつけ、そうすることで安心してしまっていた己を反省しています。どんな個性をもった子どもでも、特別扱いしないで、その子をまるがかえで好きになり、かわいがることが大切なのではないかと思うようになってきました。みんなにあわせることが難しい子どもがおり、初めは自分自身がその子に過剰な事前の声かけや安心できるサポートをしていたことがあったけれど、心を鬼にしてみんなと同じ事が出来るように厳しくし、「あなたはみんなと同じなんだよ」と伝えるようにしたら、その子に私の心が伝わったのか、援助もいらなくなるくらい変わった子がいました。ただ優しくするだけではなく、特別扱いせず、みんなと同じように接する「かわいがりずむ」の精神でこれからもいければと思います。

早川先生の講座や合宿の後、子供とくすぐりごっこやじゃれあいを楽しめるようになり「かわいがりずむ」精神で子どもに接することが出来るようになったと思います。貴重な体験を与えてくださった早川先生、奥様、スタッフの方々、本当にありがとうございました。

[考察]

2007年新学期がはじまった9月初旬、筆者はH・Mさんが勤務するN小学校の校長先生に電話をかけた。「1学期クラス運営が上手いかず大変そうだったけれど、今は毎日そのクラスに顔を出したくなる位楽しいクラスになっています。ありがとうございました。」と御礼のことばを聞くことができた。

このレポートは彼女が産休に入る前の2008年3月末に提出していただいた。イタズラ村合宿を体験し「遊び師養成講座」で学んだ成果がこの実践である。この実践は典型的な「子ども力＝遊び力」という考えに基づいたものだ。名人芸という授業でなくても「子ども力・遊び力」を学んで身につけることができれば誰でもができる教育実践であると考ええる。

「かわいがりずむ」とは筆者の造語である。30年前、精神科医・渡辺久子氏と出会ったとき「発達障害の糸口は大人が子どもを愛おしく、かわいいと思えるようになることから見えてくる」と筆者に語った。氏の言った「かわいいと思う」気持ちは人間的に奥深いものだった。「かわいい」と思えるようになるにはどうすればよいのか、その時以来考えてきた。NPOを創設して、教員生活を辞め、つまり「指導」という立場から退いて、「遊ぶ」ことを基軸にゆったり活動する中で見えてきたのである。その答えは子どもイタズラ村でたっぷり子どもと遊んでいるときに感じる「かわいさ」の情景が筆者の心に蘇らせることができた。子どもたちが遊んでいるときに見せるイタズラっぽい目、けんかしている時の顔、悔しくて流す涙、嬉しくて見せた笑顔……。大人が子どもと一緒に遊んで、こどもの「かわいさ」を引き出せば良いんだ……。

H・Mさんはまさにイタズラ村の門を叩き体験することで「かわいがりずむ」の精神を学んだといえる。「発達障害」と呼ばれる子どもたちを教育現場では、マニュアル通りに子どもを操作する「行動主義的」指導や、現場と「薬漬け」医療との連携が横行している。筆者はH・Mさんの実践の中にこそ子どもたちが求めている真の「ケア」があると考ええる。

Ⅴ 富山大学総合科目「人権と福祉」レポートより 心のケアとしての事例と考察 ①

事例としてして一番ふさわしい事例がT大学の学生A・Kさんのレポートである。筆者は1999年よりT大学に於いて総合科目「人権と福祉」（15時間中5コマを担当 受講生約100人）の講義を行っている。この時はまだ「子ども力・遊び力」という考えが筆者の中にはなかったのであるが、学生を講義に引きつけるため「パフォーマンス」として「皿回しワークショップ」を10分間ほど行っていた。この無意識に行っていたパフォーマンスの中に「子ども力・遊び力」の萌芽があったことが伺える。以下のレポートは2002年の講義で提出されたA・Kさん（3年生 女性）が1コマ目の講義の後に書いたものである。



「遊ぶことの大切さを学んで」

講義中に皿回しをすると聞いたとき、一瞬耳を疑いました。それに加え、教室内に見知った人がいない状態で、『ペアを組んで』ということからも、最初は『ああ一面倒だなー』と思わざるを得ませんでした。しかし、皿と棒を手にしてみて、その思いはどこかへ吹き飛んでいました。楽しかったのです。私もペアを組んだ方も皿を完全に回すことはできませんでしたが、それでも何か、これまで忘れていた遊ぶことの楽しさを思い出せた気がして、懐かしさと嬉しさで、私は皿回しの間中笑顔でいました。（中略）

私は幼い頃から中学生の頃まで何度も転校を繰り返しており、中でも、小学校高学年・中学校に経験した出来事を契機に神経症を発症してしまい、それからは、心を許せる友達もおらず、大学入学とともに症状が悪化してしまい、殆ど休学状態、そして現在は留年1年目も半年にさしかかっています。ですから、正直なところ”遊ぶ”ということに対する思い出は、小学校中学年からは持ち合わせてはいません。もうこの神経症との付き合いも長いですし、仮に治ったとしても、下ばかり向いて過ごしてきた時間は戻らない・自分はこれからずっと空っぽのまま過ごしていくのだと、将来に希望が持てないままでいましたし、その無気力さから何かに”心から感動する”楽しいと思う、嬉しいと思う、こういうこと自体ありませんでした。

でも、今回の講義でやった”遊び”小学校のころ友人たちとおもちゃを手作りして遊んだこと、駆け回ったこと、笑い転げたこと、そういう懐かしい思い出がありありと浮かんできて、何かこみ上げてくるものがあり、同時に、自分はまだ何かに感動できる心は失っていないのだと少し安心し、これから生きていく気力がわずかながら戻ってきたように感じます。

今まで自分がこれから生きていくべき長大な時間をどうしようかと途方に暮れるばかりでしたが、今後はこの講義での経験を生かし、前向きに立ち向かってゆこうと思います。今回のこの講義を受講できて本当によかったです。

v 富山大学総合科目「人権と福祉」レポートより 心のケアとしての事例と考察 ②

以下のレポートはA・Kさんが「人権と福祉」5コマ目終了後に書いた文章である。彼女の心の変化が明瞭に読みとれる。

「最後の講義を聞いた感想」

(略)

今後、子どもと関わる（もしかしたら自分の子どもを育てる）機会もあるかもしれません。でも一連の講義を通して、『子ども力』というものを知り、少し理解を深めることができたと同時に、自分の中で色んなことの整理の方向性が少しずつ見えてきたように思います。子供との関わり方にしても、自分の身の処し方にしても、ここで文章に表すほど簡単ではないでしょう。でも、これから人と関わって生きていく上で、この講義で学んだこと、考えるきっかけを貰ったことを大切にしたいと思っています。短い期間でしたがありがとうございました。

【考察】

- i) 1コマ目の講義ではA・Kさんは、「一瞬耳を疑いました」とあるように、最初は遊びを「講義室で皿回しなど変(?)」と思っているようだ。その後、「その思いはどこかへ吹き飛んだ」、「これまで忘れていた遊ぶことの楽しさ」と記述しているように、少しバカにしていた「皿回し」という遊び体験を「楽しい」と受け入れた。その瞬間、A・Kさんの心の中に「子ども」が甦った。またペアになった学生と一緒に遊ぶことで、人に対する不信感（「心を許せる友達もいない」）が払拭された。これこそ「子ども力」が培われていく過程であると考えられる。
- ii) A・Kさんは、皿回し遊びを楽しんだことで、子ども時代を思い出した。A・Kさんのみならずこれまでの講義で多くの学生たちはA・Kさん同様、思い出したくない辛い体験を赤裸々に語り始める。（悩みを持つ学生の多くがそうである。父親からの虐待、貧困な家庭生活 アルバイト漬けの学生生活、一家心中未遂など）講義室で一緒に遊びを楽しむ私への「信頼感」が生まれ、学生たちが心を開いてくれたからであろう。
- iii) 「これから生きていくべき長大な時間を、どうしようかと途方に暮れるばかり」だったA・Kさんは、しかし、5コマ目の講義の後では「今後、子どもと関わる（もしかしたら自分の子どもを育てる）機会もあるかもしれません」、「自分の中で色んなことの整理の方向性が少しずつ見えてきた」、というまでに変化した。彼女の心の中では新しい「ナラティブ（物語）」が描かれ始めていることが分かる。
- iv 「心のケア」としての可能性
「皿回しワークショップ」を共有することにより筆者との信頼関係が成立して行く i) から iii) までの流れは、A・Kさんの心がケアされていく過程であるかのようだ。子どもたちも含め心のケアを必要とする人達は、専門家だけでなく、信頼できる身近な人にケアをしてもらいたいと思っているのではないかと感じている。「子ども力・遊び力」を身につけ、皿回しをとことん遊べる人なら誰でもできる「皿回し遊びケア」に可能性を感じる。

筆者は「発達障害」や「自閉症」と呼ばれる子どもたちと長年教師としてかかわってきた。教師を辞めてから十余年経ったが、この間、多くの悩める子どもや親たちと「遊ぶこと」を通して係わってきた。そして、やっとその「不思議な」障害が見えかけてきたような気がしている。

筆者は発達障害・自閉症が「生まれつきの脳機能障害のため、対人関係の構築やコミュニケーションを苦手とする」との仮説に違和感を感じてきた。その仮説に基づいた人権啓発や理解をねらった著作がブームになっていることにも大いに疑問を持っている。「自閉っ子、こういう風にできてます」、「発達障害のピアニストからの手紙」、「私はアスペルガー 主婦で社長で・・・」、「ふしぎだね自閉症のおともだち」等の書名をつけた本が店に並んでいる。

そんなブームの影で、日本の多くの子ども達とその診断名をもらい（発症率6割とも言われる）悩み苦しんでいるのが現実だ。筆者は何か違う！と感じ続けてきたが、その違和感を表現する術を持たなかった。

しかし、福井大学（「こども環境学入門」）の講義で自分を「ADHD」だと認めるH・S君と出会い、「発達障害」というふしぎな「障害」を「遊ぶ」または「かかわる（寄り添う）」という観点から迫ることで、その悩みの改善を図ることができるのではと考えることができた。

◇2013年10月12日（水）

〈レポート：工学部2年H・S君〉

早川先生の講座を経て私はただただ感心しました。早川先生は教育者として、大変異質であり、優秀な方なのだろうと感じました。というのも、イタズラ村の存在自体が学校へ行けない子にとって大変有用で数少ないツールだろうと感じました。

なぜそう思うのか？ というと私も中学校の頃、いじめられてました。よくあるイジリのつもりであるものが私にとって耐えられず、自分にとっていじめであるというふうに受け止めてしまったのです。もちろん私を「イじる」友人はそれには気付いておりません。私はただ苦笑いするしか対処できませんでした。

しかし、私は学校を休みませんでした。なぜなら私は居場所が存在したからです。当時の担任は私が学校が終わった後に音楽スタジオに連れてってくれたのです。スタジオではただ黙々とドラムを教わりました。ただ音に身を任せて体を動かす間はイヤな事は感じませんでした。いつしかスタジオは私の「学校以外の居場所」となりました。

そして担任は自分も昔、自傷を行っていた事を教

えてくれました。当時の自分に歩み寄ってくれたのです。私は安心し、学校で戦いました。そして私はアイデンティティを確立し今ではイジってきた友人と対等に仲良くいれます。そう、私は「いじめを苦に自殺する学生」はその学校以外にコミュニティを持たない事で、自分を表現出来ずに自らの命に手をかけてしまうのでは？と考えます。

ではなぜ学校で相談しないのか？ というと、「先生」は圧倒的な強者であり、否定を恐れているからだと思えます。

そういった点をふまえて配布資料に目を通せば、高1の男子は「人数が前回の3倍であった」、「県外からもたくさん人が来た」とまるでイタズラ村の事を自分のことのように話します。これは明らかにイタズラ村というコミュニティを受け入れています。さらに「先生の顔にラクガキをした」と喜んでいます。これは以前は考えられない強者への行いであるとうかがえます。以上より、イタズラ村、ならびに早川先生は教育者として希少で優秀な方だろうと感じました。これからもずっとあればいいなあ！！

初回の講義のテーマは「大人にとっての遊び力・子ども力とは何か」。まず、皿回し遊びのワークショップで学生との距離を縮めると同時に、関係性も築く。遊びは学生たちを子ども時代に引き戻す。多くの学生は筆者と一緒に遊ぶことで信頼を寄せるようになる。H・S君はいじめ体験を語った。多分思い出したくなかったと思われる体験を。自分の子ども時代を思い出すことで、現代の子どもや親や教師が抱える問題点が露わにする。約1割の学生は成育歴に辛いことや苦しみを抱えている。いじめ、不登校、親の離婚、虐待、貧困、発達障害、3.11東日本大震災……。まず、自分たちの中から課題や問題を見つけ、そして、子どもの為に学生として何ができるか考えられるようになっていく。これが大学の4コマの講義での筆者の任務だ。

※配布資料 「子どもの遊びと安全・安心が両立するコミュニティーづくり」(子ども環境学会編)の第4章「山里の遊び場づくり・イタズラ村モデル」(早川たかしが分担執筆)

◇2013年11月10日(水)

〈レポート：工学部2年S君〉

「ADHD」多動性注意欠如。私にとって非常に聞き慣れた言葉です。そう、私を制限していた檻に貼り付けられた冷たいプレートでもありました。そう、私は軽度のADHDでした。注意力の欠如や落ち着きのなさ。そういった点はいまだに当てはまっています。私が小学4年生の時、秋分の日を越えた数日後に、私に「ADHD」というプレートが下げられました。勿論自分が直接言われたわけではありません。しかし、母の葛藤を幼い私は敏感に感じ取りました。「他人とちがう自分」に向き合って生きようになったのはその日からです。「普通の子に合わせる」ことができない自分に混乱しました。しかし、それを気付かせたのは首に下げられた「ADHD」のプレートです。そのプレートは友人と共に遊んでいるときですら、ふとしたときに首根っこをひっぱります。「お前はちがうぞ」と……。

しかし、私は今思うのです。私が実際に浮き出したのは首からプレートを架けられた時からだったのでは？と。きっと自分が変わっていることを自覚しなければ私はそのままでいられたと思います。しかし、「ADHD」という言葉は、私を簡単に「人間」

から「ADHDの人間」としてカテゴライズし、他人と区別しました。

私は「ADHD」という言葉におおいに疑問を感じています。ちょっと変わっている人をカテゴライズし名札を付けることで、より他人から隔絶してしまうだけでは？そして外国では投薬を行っているとのことだが、全く大人はバカなんだな、と思います。私自身落ち着きのない子どもだったけれども、今ではなんとか受験を乗り越えられる程度には回復しました。しっかり大人が向き合ってくれば「ADHD」という言葉は根絶するのです。学校の先生、親は根気強く私を見ていてくれました。

私が道から外れたときはぶん殴ってくれました。そして、自分が前に進む(成長)度にプレートは朽ち落ちました。今、私は自分が変わっていることを武器にしています。しかし、勿論大変です。でも人並み以上に生きることはADHDの私でも可能でした。でも、どうか今後子どもたちにプレートを掛けてしまうことがなければと思います。個性の強い子には、大人が見守っている中で自由にさせていれば立派になるはずなので……。

2コマ目でH・S君は自らを「発達障害児」だったと告白し、「発達障害と呼ばないで!」と訴えた。ここまで明確に詳しく体験を語る学生は見かけたことがなく、筆者は感動すると同時に、H・S君の思いを伝えなくては、という使命感に駆られた。

レポートは私達子どもにかかわる仕事をしている者にいくつものことを教えてくれる。

- i) “「ADHD」というプレート”という表現に現れているように、「ADHD」とであると診断名をつけられたことの辛さをイメージすること。
- ii) ていねいに根気強くつき合ってくれる大人が1人でも存在すれば、「発達障害」があっても成長できること。
- iii) 安易に医学的な診断を下すことの怖さ。

H・S君の願いは「個性の強い子には、大人が見守っている中で自由にさせていれば立派になるはずなので……」という最後の言葉に凝縮されています。また私たちが、生きる困難さをかかえる子どもたちとどう向き合えばいいのかを考えさせられます。

vi 福井大学一般教養「こども環境学入門」のレポートから考える ③

◇2013年12月19日(水)

〈レポート：工学部2年S君〉

先週は女の子のとなりの席だったので^(※1)「ハッポー!! こども環境学サイコー!」と思ったが、気づけばかなり重い話になっていた。明るい早川先生にこんな過去があったとは…。信じるのに時間がかかりました(5分ほど)。しかし、この話^(※2)は価値があったと思います。早川先生自身、この話をするのは大変苦しかったでしょう。

子供の行動は探ることが大変むずかしいです。しかし、事故が起きてしまった事でまたリスクアセスメント、反省をしっかりと行っている事に感心した。というかおどろきました。また、早川先生は葛藤の末、責任を受けとめ、今後、つぐないとともに活力にしようとしてるように見受けました。

実際に子供の過失致死事件は多く存在しますが、本当に難しい問題だな…と感じました。なぜならこういった「子供をあそばせる目的」であるにもかかわらず過度の「対策」を行い、子供を押さえつけていたら、全く意味ないわけですよ。自由にあそばせながらも、出来る限り見ておかなきゃいけないので

す。なんて面倒なんですか…。よって重視されるべきところは「リスクを起こさない事」より「リスクを最低にする事」、起こる事の想定だったのかもしれませんが。リスクを起こさなければ危険予知が出来なくなってしまうのです。

しかし、危害を加える方、受ける方がどちらも子供だったらどうなるでしょう。私自身、中学生の頃、人を気絶させてしまった事があります。当時の私にとって「これくらいで人って気絶するの…?」なんて思うくらい簡単に子供の命は危ぶまれました。それから私は人をなぐる事が恐くなりました。このように、危害を加える方にも影響は多くある。なのでやはり「リスクを起こす事」自体は子供にとって非常に有益なのではないか?とも思います。しかし、問題になるのは、とりかえしがつかなくなった場合です。相手に重度の障害を与えてしまった時、どれだけ反省しても、それはむくわれる事はありません。

なので、リスクを最低にする事が最重要課題となるでしょう。

H・S君は「5分」もの時を筆者の辛い体験に寄り添ってくれたのだと思うと、彼の人間性に胸を打たれる。また、「この話しは価値があった」との批評に癒された。

テーマに対しては、大人のリスクへの過剰な反応を危惧し、「リスクの効用?」について言及し遊びの本来の面白さをどう守るか「深く」考えている。

このレポートには未だその「深さ」は詳しく論じられていないが、3コマ目のレポートでは、児童書を読むことが好きな現在の自分の目線から、大人の視点と子どもの視点を交差させながら、筆者の活動や子どもという存在や遊ぶということの本質に対し、見事に迫っている。

※1 講義が始まる前に学生たちに席を決めるクジを引いてもらう。男女がペアになるように仕組まれており、学生は小学生になったように喜ぶ。ねらいは、課題を2人で話し合い考えるためや、毎行われる遊びのワークショップでコミュニケーション力をつけるため。

※2 2008年に子どもイタズラ村・真生会病院親子合宿で10才男児が死亡するという事故を筆者が自ら語り、「遊ぶこととリスクマネジメント」をテーマにした講義

◇2014年1月16日(水)

〈レポート：工学部2年S君〉

突然ですが、ぼくは児童書が好きです。小学校5、6年生むけのものを特に好みます。「かいけつゾロリ」や「ズッコケ3人組」などなつかしいもので、「かいけつゾロリ」の方は「イシシ」と「ノシシ」をしたがえたゾロリが、イタズラをしつつ何かしらを達成していきます。ゾロリのほうが、少し子供向けですが、かなりメタ的な表現や工夫が用いられています。また、「かいけつゾロリ」より少し上の世代のものである「ズッコケ3人組」でも同じく3人組がお互いの個性を発揮して問題を解決していきます。

このように、3人組で団結し1つの目標に向かっていくのが児童書のセオリーです。しかし、文学的側面が強くなる高学年向けの小説になってくると、わりと子供だけで解決できない問題が存在していきます。そしてその問題は解決することなく、あっさりと過ぎて



いってしまう事もあるのです。

私が児童書が好きな理由として、「そのシビアな現状を子供に見せるのか〜」っていうところ、さらに「子供から見て、どう映るのだろう」という所を考えると、なにか不思議な気持ちになるところがあります。こう考えてみると案外、子供ってクールなんじゃないかな〜と思います。しっかりと自分は子供であること、出来ない事がある事をちゃんと理解できているのではないかな…と思います。それはもちろん良い事なのですが、どこか切なくも感じます。彼らは確実に無限の可能性を秘めています。というのも、それは彼らの行動力に他なりません。私の地元では、ちかくにショッピングモールはあるにもかかわらず20km先のジャスコへチャリンコで向かうのがなぜか通例となり、地元の小学生はみんな遠い遠いジャスコへ小さなチャリンコで走るのです。(ちなみに私は友人とはぐれて泣きながらさまよいました) こんな事、今やれと言われてもできません。彼らは自分の体力メーターをカラッポにするまであそび事が出来たのです。温存を選択しない事は大人には出来ません。

でも我々は、その特技を活かす場を潰していつてのかもしれない。

川辺「ここであそばない」道路「ここであそばない」公園「ボールあそびを禁じます」

では、どこであそべって言うのでしょうかね。神経質な大人が増えました。ちゃんと子供たちは大人のピリピリした雰囲気を感じとっています。すると子供たちは大人のためにいい子になってしまいます。大人のいいつけをまもり、決められた方法であそび、勉強をちゃんとするようないい子になってしまいます。しかしそれって、本当に「いい子」なのでしょう。か？私は疑問に思います。もっと子供たちの自由な発想でボロボロに汚れてめちゃくちゃに怒られるほうが健全に思えます。

なので私は早川さんに出会った時に、まだまだ子供は救われると感じました。昨今、子供は子供である事が困難になってしまったのですから。私が小学生の頃、大人が何を感じ考えているのか分かりませんでした。だから怖いし尊敬できました。ですが今の大人はどうでしょうか、うろたえていたり、子育てを満足に行えず、社会全体の雰囲気が自分勝手になっているように思えます。よって大人は懐があさく

なっていました。それを子供たちは高い感受性で見抜きます。するとどうでしょう、あんな大きかった大人は等身大へと変わってしまいます。そこで子供は「子供である事」を破棄し、大人ぶってしまうのです。

だからこそ子供はすごいんです。我々なんかよりアクティブで頭が良いのです。ありあまるパワーを大きな懐で包み、自由にしてあげなければ危なっかしいほどに。大人ぶった子供はもう子供にもどれないのです。豊かな土壌をつくる事をやめ、芽を出しはじめてしまいます。もったいないと思います。そこで早川さんの活動は土壌づくりに最適な発想力を養える点がすぐれていると見受けました。資料にもあったとおり、リスクを受容し、チャレンジしていった方が、逆にリスクが発生しにくいという結果があります。この結果はひとえに親の存在が関係しているんじゃないかと思っています。というのも、もちろん子供自身が先天的に注意力が散漫な場合をのぞいて、普段から親がケガをする事に寛容であるならば「多少の事なら大丈夫！」とチャレンジしている子供となり、思い切りのよい判断が出来るのだと思う。一方、親が子供のケガに過剰に反応している場合、必要以上にケガをおそれて、ケガが考えられる状況になった時、足がすくみ、判断が遅れる可能性が高くなります。皮肉ですが、中々、理にかなっているような気がします。

しかし、あまりに手放しに育ててしまうと思わぬ事故もありえます。ある程度のしつけは必要ですが、親だけではあまりにムズかしい。やはり、必要になってくるのはお互いをサポートできるような友人なのです。ズッコケ三人組のような友人がいれば、強く育ちます。やはり、子供は知れば知るほど難しい存在です。こども環境学をかじってさらに思いしらされました。しかし、おもしろく、尊敬すべき対象にもなりえました。

今後とも、子供にかかわる場があれば、あそびを通してかかわりたいと思います。



「発達障害と呼ばないで」というテーマに迫るためにH・S君のレポートを考察してきた。今、「発達障害」という定義が一人歩きしているようだ。アメリカの診断基準が流布する中、診断によって、ほんの一握りは有名人になるが、多くの「本人」は疑心暗鬼になり不安を募らせる。親や教師は責任を回避し、子どもと向き合うことを忘れて。そして、一部の良心的な医師をのぞいて、多くの医師は投薬に偏った「治療」を行っているように思える。

最終回このレポートは、H・S君の「僕の子育て論」のように仕上がっている。発達障害があるかないかを問わず、子ども達は遊びを通してどう育つのかということ、を、「懐が浅くなってしまった」私たち大人に教えてくれている。こんなH・S君に一言「H・S君は本当にADHDだったの？」と。

素晴らしいレポートを書いてくれてありがとう。